



「お、斧乃木ちゃん？  
何も「こ」までしなくとも。」

「あの二人には手を出して行くせよ、  
僕には何も無いなんて納得出来ないもん」

「そりや忍と八九寺は特別だし」

「だったら僕も…んらで…  
特別に…んあつ！」

「ドク」

「ズズ」

「ズズ」

「ドク」

「ん」

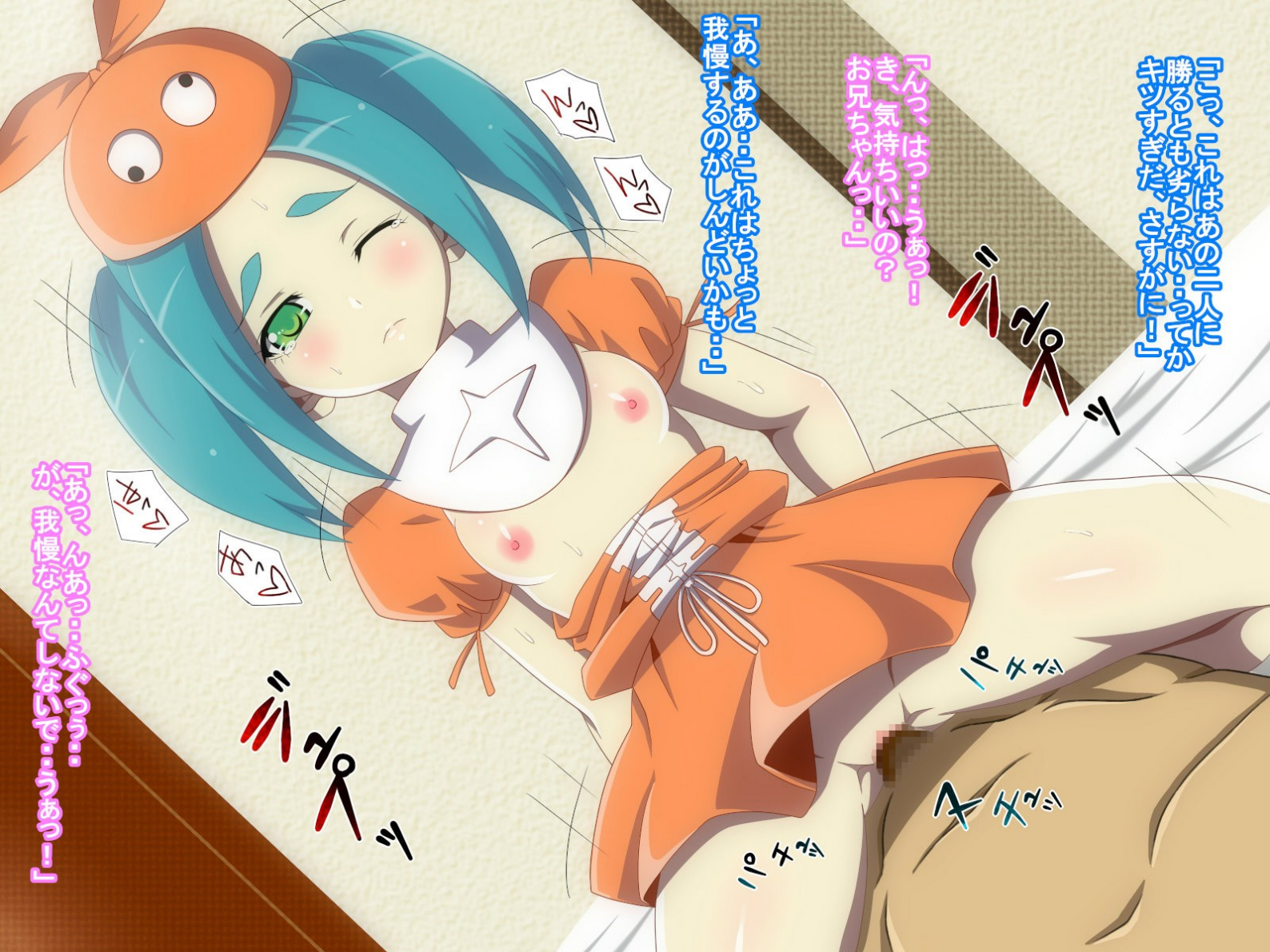
「ん」

「うっ、これはあの二人に  
勝るとも劣らないうってが  
キツすぎだ、さすがに！」

「んっ、はっ…うあっ…  
き、気持ちいいの？  
お兄ちゃんっ…」

「あ、ああ…これはちょっと  
我慢するのがしんどいかも…」

「あっ、んあ…んん…  
が、我慢なんっ…んん…んん…  
「…んん…んん…」





「はぁっ、はぁっ。お兄ちゃんのチンポが  
膣内でビクビクしてる。。。  
はってこんなに気持ちいいんだ。。。」

「くぅ。。。。。。またしても膣内に  
出ってしまった。。。」

「ふぁっ。。。。。。精液溢れてきた。。。  
これは妊娠確実だねお兄ちゃん？」

「。。。。。。責任はとります。。。」



「おっぱいやめてくださいー!  
さすがにこれはシャレになりませんか?」

「イヤだ! 今日こそ僕は!  
八丸寺を抱く!」



「さっさと抱えよ!」  
おっぱいやめよ!」

ニッ!  
ニッ!

ニッ!  
ニッ!







「はあっ、はあっ……っあっ……」

「ふうっ……わ、悪い人九寺……興奮しすぎちゃった」

「本当ですよ全く……まだ膣内でピクピクしてる……お腹の中、熱くてしょうがないです……」

「本当すみませんでしたー」

アハハ

アハハ

アハハ

アハハ

アハハ

アハハ

アハハ

アハハ

アハハ



「何をやるんだ忍」

「何をやるんだ、じゃないわ  
このアホ主がつー！  
毎晩毎晩盛りのついた猿のよつー！」

「いた、痛らっしばー」

「痛くしつてんしゃアホー  
わしとお主の感覚が繋がって  
いるとどう話したじゃあうらー！  
まいったく」

「ああ、そりゃや  
そんなうら言っしたな。ー」



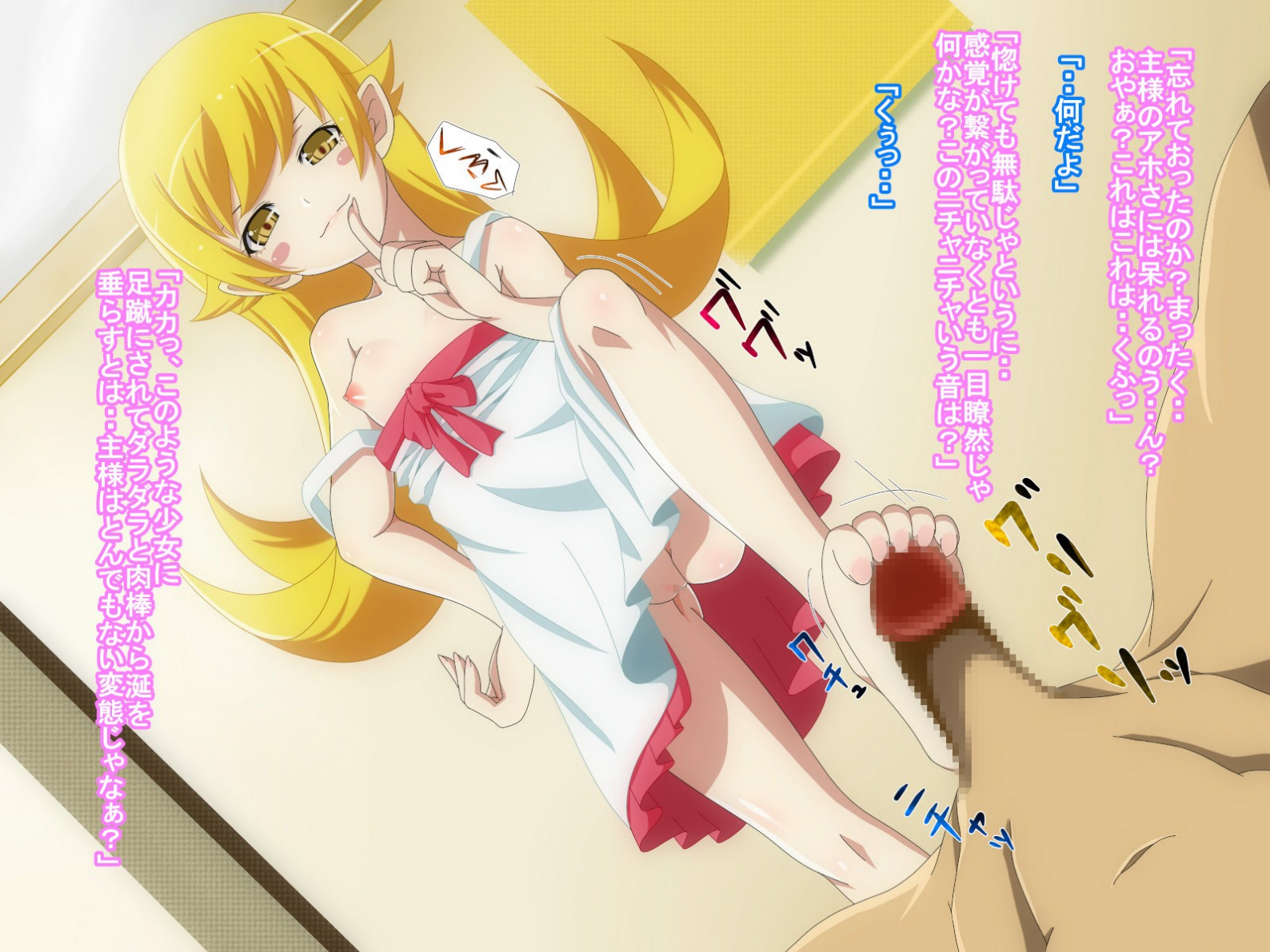
「忘れておったのか？まったく…  
主様のアホさには呆れるのう…ん？  
おやあ？これはこれは…くぐっ」

「…何だよ」

「惚けても無駄じゃというに…  
感覚が繋がっていないくとも…目瞭然じゃ  
何かな？このニチャニチャいう音は？」

「〜ん〜ん」

「カカッ、このような少女に  
足蹴にされてダラダラと肉棒から涎を  
垂らすとは…主様はとんでもない変態じゃなあ？」



「ほれほれ、こつやって足の指で  
包み込んで、弄くり回されるのがいいんじゃないだろうか？  
くふっ、いいザマじゃの、主様よ」

「…お田…お田…」

「ん？」

「ん…射精…した…のか？  
わわっ…白く…お田…お田…なのからげん…  
これが…精液…」



「く、くふふっ…まっ、まさか足だけで射精してしまうとは、情けない主様じゃな」

「忍、んじやっ」

「はっ、はあ？ど、どうもせんわアホが！ふふう…全く節操の無いチンポじゃの、わしの足をこんなニペトペトにしおって！」

「忍、お前…」

「な、なんじゃ…」

「ん」

「ん」

「ん」

「ん」

「ん」

「ん」

「ん」



「やっぱりもう、我慢できなかつたんだなお前」

「う、うんさいわアホーお前様の興奮が伝わってきただけじゃー!」

「んっ。」

「んっ。」

「んっ。」

「んっ。」

「んっ。」

「んっ。」

「んっ。」

「ぶっん…まあいいけど…  
って忍…あんま無茶すんなっつー!」

「お、無茶なっつーおんわーんっ…ほっっ…  
んっ…んっ…んっ…んっ…んっ…」

「言わんこつちぢやない…  
もう僕(ぼく)に任(まか)せておけ、優しくしてやるからっわ!」

「んっっ…急に優しくするな…  
調子が狂(くる)うじやろうが…」

「んっ。」

「んっ。」





「あーっあーっ……やあああっ……  
「ん、んわのん」が……ちっし……やんっ……」

「すまん忍、お前の膈内が良すぎて  
我慢できないんだ！」

「んっ……んっ……んんんんん……  
しょうがな……ん……ん……  
はあっ……やあっ……で……でもっ、「んなんじゃ  
すぐ……イっ……ち……や……り……お……っ……」

「何回でもイかせてやるから  
安心しろ忍！」

「あ……ん……ら……ん……ん……を……言……い……の……わ……け……は……は……は……は……っ……  
あ、主様のチンポが……ん……ん……お……お……き……く……な……っ……て……っ……う……め……あ……あ……っ……」

**ヒキッ  
ヒキッ**

**ヒキッ  
ヒキッ**

「…きゅん…きゅん…きゅん…」

「らめつ！今出されたら…  
今精液注ぎ込まれたら…ひぐつ  
絶対イっひやうっ！」

「すまん怒…出る…」

「あつ…な、膣内でチンポがドクドクいつて…  
あ、熱い！精液いっぱい入って…くるっっっ…  
も、もっらめ！イっひやう…ひぐ…  
ひぐ…ひぐ…ひぐ…ひぐ…」



ぐんぐんぐん

らめつ  
らめつ  
らめつ  
らめつ  
らめつ

ひぐ  
ひぐ  
ひぐ  
ひぐ  
ひぐ

ぐん

ぐん

らめつ  
らめつ

「はぁっ、ふぁっ…ま…まだ膣内で  
ビクビク動いて…」

「ぶっっ、いやあちゃっばの  
膣内が一番だなー」

チクタク

ム

ム  
ム  
ム

「ふええっ…や、やかましいわアホ！  
そ、それにしても…こんなに大量に射精しおって…  
どんどん溢れ出てくるではないか…勿体無い…」

「大丈夫、まだまだ出せるぜ！」

「もう入らんわホケー！足に力も入らんし…  
まったく、本当に困った主様じやの、お前様というヤツは」

ム

ム

ム

ム







「よしっそれじゃあ  
入れるぞ、月火ちゃんっ」

「えーちまよ、やっー  
待ってお兄ちゃんー」

「いや待たんー」

「いっ、ひくうっーやっ、やだ...  
ホントに入れちゃった...」

いっ

いっ

いっ

いっ





「やあつ、らめえー激しすぎて…  
イクツ、イツちやうよおーおにーちゃん！  
イクウウウウウウワン！」

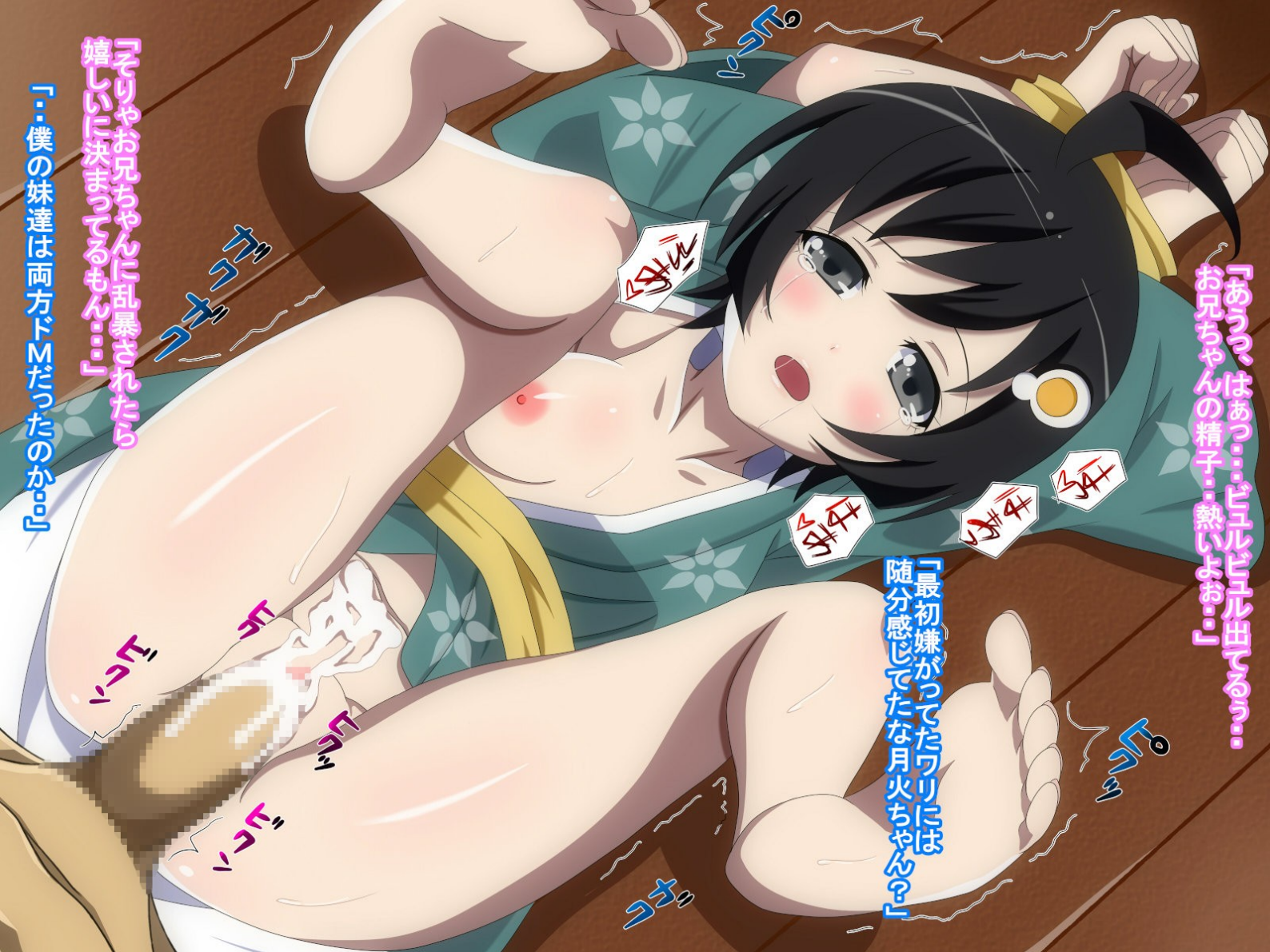
「もう限界だ！  
膣内に出すぞ月火ちゃん！」

「あつこはあつこ……ムルムル田舎の……  
お兄ちゃんの精子……熱いよ……」

「最初嫌がってたワリには  
随分感じてたな月火ちゃん？」

「そりやお兄ちゃんに乱暴されたら  
嬉しいに決まってるもん……」

「……僕の妹達は両方ドMだったのか……」





「うーひゃっ、うーひゃっのなっ」

「うん、そうそうっ…あどほ  
火憐ちゃんの好きなようにっしてっらよ」

「ん…んちゅ…れっろ…」  
（あたしの…好きなようにっらよ）」

アチャ  
アチャ  
アチャ  
アチャ

アチャ  
アチャ  
アチャ  
アチャ

アチャ  
アチャ

アチャ  
アチャ



「じゃ、じゃあ今度は啞えてみてもいい……？」

「ああ、もちろん……うおっ！」

「グシシ」

「グシシ」

「グシシ」

「グシシ」

「グシシ」

「グシシ」

「グシシ」

「グシシ」

「グシシ」

「グシシ」

「アッパッ、アッパッ、アッパッ……ちびっ、ちびっ……おっ……おっ……おっ……」

「火、火憐ちゃん、ちよつと激しすぎ……」

（兄ちゃんのチンポ……舐めているだけであだしまで気持ちよくなってくるよおっ……）



「やばっ、火憐ちゃん、そろそろ……」

「おねえさん、おねえさん、おねえさん……」  
「おねえさん、おねえさん……」

「んーイターー」

「んーんーんーんー」

「んーんーんーんー」

「んーんーんーんー」

「んーんーんーんー」

「んーんーんーんー」

「んーんーんーんー」

（出てる……っ！兄ちゃんのせーし……！）

「んーんーんーんー」

「んーんーんーんー」

「んーんーんーんー」

「んーんーんーんー」



「兄ちゃん...あたしもう...我慢できないよ...」

「はっはっはっ...火憐ちゃん...」

「...火憐ちゃん?」

「じゅん...ん...ん...ん...ん...」

ジュッ

ズズッ

ジュッ

はっはっ

はっはっ

ズキッ

はっはっ

はっはっ

グキッ

ズキッ

グキッ

グキッ



「ちよ、ちよと待った火燐ちゃん！  
それはさすがにマズイのでは！」

「やだ！もう我慢できないもん！  
んっ…んっっ！」

「うっっっい、妹に  
押し倒されるのほ…」

「んっっ」

「んっっ」

「んっっ」

「んっっ」

「んっっ」

「んっっ」

「んっっ」

「ほっ、はっっっっ、兄ちゃん  
おっきすぎぃっっ」



「はあっ、はあっ、兄ちゃん、  
気持ちいいっ?」

「ああっ、もちろんっ……っっっ」

「うれしいっ、あたしもっ……  
あたしも気持ちいいよおっっ……」

「火、火憐ちゃん!  
そんなに激しくしたらー!」

「うあっ、ひやうー!  
ス、スキいっ!にーひゃんー!」





「出してー中に一杯出して  
にーちゃん! はっ、あうっ...  
んあああああああっ!」

「んんんん」

イク

イク

イク

「ダメだ!  
もうイクっ!」

イク

イク

「あ、あたしもイク! はっ、うあっ!  
にーちゃんっ! もう... らめえ!」

イク

ん

イク

イク

イク

イク

イク

「はあっ、はあっ……で、田舎……  
中「一杯」

「しまった……ついでに……」  
「腹内に……」

「んっ……ふあっ……  
あたしの兄ちゃんなら当然、  
責任取ってくれるよな？」

「ぬっ……仕方あるまい……」

